

朗読公演「吉野 弘の世界」を終えて

制作委員会統括 竹迫ミナミ

コロナ禍 真ただ中、令和2年9月から準備を進めてきた本公演の延期が決まったのは、令和4年2月芸術祭開催直前だった。出鼻を挫かれた出演者は、それでもすぐに気持ちを取り直し「練習の時間をさらに与えられた」と前向きに取り組んだ。いつ開催出来るかもわからず、関係者一同落ち着かない状況が続いたが、令和4年5月29日に市民会館中ホールに於いて文団連の総会と抱き合わせて開催することが決定。出演者、スタッフ共々、開催に向けて再度の準備に奔走する中、アツと言う間に当日を迎えることとなった。

前日までの不順な天候が嘘のように30度を超える真夏日の予報、雨も大変だが炎天下も心配。朝8時15分スタッフ集合、ロビー展示、舞台設営の後、朗読公演ゲネプロ…。



ロビー展示 (一部)

コロナ対応のため来場者全員に氏名・連絡先の記入依頼、当日の入場料受取りなど、受付はスタッフ不足も相まって、ごった返し状態。吉野弘氏の書籍販売で待機していた、芳林堂の4人の方が見かねて手助けして下さい、とても有り難かった。

14時、観客が見守る中、静かに開幕、プログラム第一部は文団連会員による朗読、それぞれ長い間練り上げて来た朗読を熱演、音と映像の演出で絵物語を観ているような素晴らしい流れ…。休憩を挟み第二部はガラッと雰囲気を変え、吉野氏の生まれ育った酒田市よりゲストとして来訪いただいた「酒田詩の朗読会」の朗読とギター弾き語りのお二人により、厳かな中にも山形弁を交えて観客との一体感のある和やかなステージが繰り広げられた。



終演後、ゲストの阿蘇孝子さんから「皆さん一丸となってそれぞれの持ち場で一生懸命この会を創り上げていて、素晴らしい会だと思います。楽しく参加させていただいて本当に嬉しかったです。」ゲストの阿蘇孝子氏と佐々木正氏とのコメントをいただいた。私たちが文団連として最大の目標である「それぞれ、自分ごととして力を結集し事業に取り組む」という、最も誇りとしている部分を感じただけで、とても嬉しい一言でした。



最後に出演者全員で「祝婚歌」を朗読

嵐のような激動の日ではありましたが、大盛況の中に終わることが出来、出演者、制作スタッフ一同張り詰めていた緊張感から解放され、心地よい疲れを感じながらの散会となりました。